

メタ認知を促すリテラシー教育としての 意見文作成授業の研究

学校名 大阪府立富田林高等学校

所在地 〒584-0035
大阪府富田林市谷川町4-30

ホームページ
アドレス <http://www.osaka-c.ed.jp//tondabayashi/>

1 はじめに

リテラシー(読み書き)の能力は、すべての学習の基礎となる能力として学校教育においてもっとも重要視されてきた。それは一義的には、書かれた記号としての文字を意味のある言葉に変換して読む能力、及び言葉を文字としての記号に変換して書く能力を意味するが、もちろんリテラシー教育が目指す能力はそれだけではない。PISAの実施母体であるOECDは、この調査におけるリテラシーを次のように規定している。

「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」

「OECD/ PISA 新ミレニアムにおける知識と技能の測定」(文科省 2006:1)

つまり、リテラシーは、単に生徒が情報を意味づけ解釈できるかどうかというだけではなく、自分たちが読んだものについて深く考え、現実と関連させつつ活用していく能力であると規定されているのである。情報として与えられた知識を活用するためには、知識に対する自己の理解を内省的・客観的に把握していく「メタ認知(認知に対する認知)」の過程が不可欠である。そして、このメタ認知を生徒に促すためには、他者とのコミュニケーションを通じて、自己の理解を問い直し、語り直す活動が必要となる。そこで今回は、このような活動の実践例として国語科の意見文作成授業において他者との討論を取り入れ、「自分の意見を論理的にしかも他者の視点にも配慮した形でまとめる」(三宮 2007)リテラシーの力を育成することを目的とした。またこのとき、自らの意見について学習仲間とコミュニケーションするために ICT 機器を導入し、そのことによって、これらのリテラシーの育成を促進したいと考えた。

2 研究の経緯

「メタ認知を促すリテラシー教育としての意見文作成授業」の授業実践はすでに申請者らによって、2008年度、2011年度の二回にわたって大阪府立高等学校の一年生を対象に実施されている。これら二回の意見文授業の結果、この授業の主目的である論理的な文章構成力の獲得について、プレテストとポストテストを用いて検証したところ、殆どの生徒がプレテストでは言及のなかった想定反論、再反論への言及が授業後にできるようになっていることが分かった。また、これらの実践から、論理的な文章構成力や意見文の形式の習得と同時に自己の認知に対する気づきも得られたことが分かっている。(たとえば、授業後の感想として「自分と反対の立場に立ってみて意見を考えられるようになった」との感想や、学習仲間との対話によって「自分の考えを主張するだけでなく他の人の意見を聞いてまた考えることの大切さが学べた」「これしかないと思いつけるのではなく人の意見や想定反論から考えの幅を広げることができてよかった」と感想があった。)

ただ、これまでの授業は、授業を受けた生徒たちには好評であったものの、それぞれの意見について話

し合いをする場面において、自分とは異なる意見に対し「そのような考え方」もあるのだ、という他者の考えを把握するレベルに止まり、結果として、新たな解決策が生み出され、それを踏まえた文章化というレベルには到達しなかった。また、その後提出させた、新聞の記事内容に対し意見を述べる課題でも、自身の主張や根拠が新聞記事の筆者のものと同じであり、「私も筆者の意見に賛成だ。なぜなら～筆者の根拠～であり、私もそう考えるからだ」他者の考えに追従する姿勢がみられ、自分自身の考えを明確に持てていないのではないかという点に課題が感じられた。

3 研究の目的

以上のような研究の経過を踏まえ、意見文作成二年目にあたる今回の実践では授業を通して実現したい生徒像として次のような生徒像を考えた。

- ・ 自分とは異なる意見（反対意見）であっても、それに対して考えることができる
- ・ 自分の考えをもとに、学習者間で討論ができるようになる
- ・ ある課題に対して、反対意見も考慮したうえで、どのように対応するか、どのように解決するかを協同構築できるようになる

また、授業を通して獲得させたい力としては、次の四点を設定した。

- ・ 課題文の趣旨を正確に読み取り、課題に対応した文章を書く力
- ・ 自分の主張を的確かつ論理的に伝えるために、主張を支える根拠、そして根拠をサポートする裏づけを自発的に考える力
- ・ 自分の主張の根拠、その裏付けを自分の主張を支える理由、理由を確かなものにする裏付けを書き自分とは反対の意見の根拠を考え、それに対応した意見文を書く力
- ・ 感情の部分を揺さぶられることによって文章を書くというだけでなく、論理的な文章を読み反駁する力

以上を本研究の目標として設定し、今回の授業に取り組んだ。一年生を対象としたこれまでの実践では意見文の形を学ぶことに主眼が置かれていたが、二年生に当たる今回の実践ではこの意見文作成の授業をさらに発展させる形で、学習仲間との対話を通じて自己の理解を問い直し語り直すことに主眼を置いた。そのために、授業を行うに当たって次の三点に留意した。

- ・ 筆者の意見を丸写しにするような文章を書かせない工夫をする。（意見が分かれる文章をかく、感情が入り込みにくい文章を用い、筆者の意見を批判的に読む力をつける）
- ・ 考えをもとに、学習者間で討論ができるようになるための仕掛けを用意する。
- ・ 裏付けを書かせる（「根拠」を「理由（なぜなら）」と「裏付け（たとえば）」に分けて考える。裏付けについては主観的なものを出発点としながらも、より説得力を高めることを意識して客観的な事実などを調べたり挙げたりするように促す）

なお、三点目の「裏付け」については、今までの意見文の分析から生徒たちが苦手としていることが分かっている。そこで、今回は新しく「裏付け発想トレーニング」を用意し、ある主張を支える根拠（裏付け）を可能な限り多く産出する経験を繰り返すトレーニングを試行し、このトレーニングを通して生徒たちが

どの程度根拠を産出するようになるのかを調べた。

また、今までの授業では生徒たちが書いた「意見文」の分析や、それに対するコメント、まとめなどを次の授業で教員がまとめ、プリントを作成して配布するという手続きを行ってきたが、この方法ではどうしても書かれた意見文への即応性が失われてしまう。さらに生徒たちが作成した文章（結果）に対して、教師がフィードバックすることは、教師による解（評価）を示すこととなってしまう生徒の内省を促すことは困難である。むしろ、書画カメラとプロジェクターを用いて、文章作成過程をクラス内で共有化し対話することで、書き手である生徒の内省をより促すことが可能になると考え、今回は書画カメラとプロジェクターを導入して生徒たちが書いた意見文を即時投影してコメントや修正点を指摘したり、討論のベース資料として使用することにした。討論のベースとなる意見文を即応性のあるメディアで提示することによって、さらに学習仲間との対話が促進され、自己の発想や思考の傾向をつかみ、自己の理解を内省的・客観的に把握していくメタ認知の能力を促進できると考えたからである。

4 研究の方法

i. 授業対象； 本校 第二学年 九クラス

授業時期； 2013年1月～2013年2月 『現代文』の時間 週2時間×四週 計七時間

ii. 使用課題

①プレテスト課題

「鳴門教育大学高度情報教育センターテクニカルレポート No.1 メタ認知を促す『意見文作成授業』の開発—他者とのコミュニケーションによる思考の深化を目指して」所収の「意見文課題④」を使用

②討論課題①「生命の授業」（鳥山敏子著 「いのちに触れる—生と性と死の授業—」1985年刊

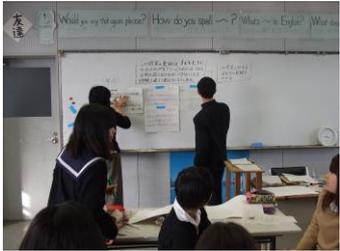
③討論課題②「医療と功利主義」（スティーブン・ロー『ジョディーとメアリーの最大幸福』2003年刊

iii. 使用機材

- ・ プロジェクタ1台 (EB-900) エプソン
- ・ 書画カメラ1台 (EIPDC06) エプソン
- ・ プロジェクター取り付け型電子黒板ユニット (EIPIU02) エプソン
- ・ iPad 32GB 1台 Wi-Fi モデル APPLE

iv. 授業展開

	授業内容	目的・留意点	使用機材
1 時間目	 <ul style="list-style-type: none"> ①プレテスト課題 ②文章産出方略調査 ③プレ裏付けトレーニング ④解説 	<p>説得力のある意見文とはなにかについての概説を行う</p> <p>文章作成に関する自己認知（方略・到達度）の意識化＝メタ認知</p>	

<p>2 時間目</p>	<p>①裏付け発想トレーニング ②ポスト裏付け発想トレーニング ③トレーニング後、 四人でグループを作り、 「出された発想のうち、客観的事実と言えるものはどれか」をチェックする</p> 	<p>グループワーク 客観的事実を探しながら意見文を書くように指示</p>	
<p>3 時間目</p>	<p>①「想共有（グループで良いと思われる裏付けを二つ選び用紙に記入。発表。） ②「生命の授業」について文章作成</p> 	<p>出された発想を学級内で共有する。</p>	<p>プロジェクター、 書画カメラ、プロジェクター取り付け型電子黒板ユニット、iPad</p>
<p>4 時間目</p>	<p>・「生命の授業」に関する討論 ①賛否それぞれのグループで、異なる意見のグループに対する反論を考える ②グループごとに相手の意見に対する反論・再反論を発表</p> 	<p>出された発想を学級内で共有する。</p>	<p>プロジェクター、 書画カメラ、プロジェクター取り付け型電子黒板ユニット、iPad</p>
<p>5 時間目</p>	<p>・「生命の授業」に関する討論 ①賛否それぞれのグループで、最も説得力ある根拠・裏付けを考える ②グループごとに発表（相手が納得できる裏付けをて発表） ③『最も納得できる』という観点からグループへの投票を行う</p> 	<p>出された発想を学級内で共有する。</p>	<p>プロジェクター、 書画カメラ、プロジェクター取り付け型電子黒板ユニット、iPad</p>

<p>6 時間目</p>	<p>・「医療と功利主義」について共同で文章を書く</p> <p>①賛否それぞれのグループで、最も説得力ある根拠・裏付けを考える</p> <p>②裏付けを班で見せ合い、いいと思うものを共有する。</p> <p>③功利主義に関して各グループで共同で、一つの意見文を作成する</p> 	<p>出された発想を学級内で共有する。</p>	<p>プロジェクター、書画カメラ、プロジェクター取り付け型電子黒板ユニット、iPad</p>
<p>7 時間目</p>	<p>・「医療と功利主義」に関する討論</p> <p>①グループごとに発表（相手が納得できる裏付けを考えて発表）</p> <p>②『最も納得できる』という観点からグループへの投票を行う</p> <p>・ポストテスト課題</p> 	<p>出された発想を学級内で共有する。</p>	<p>プロジェクター、書画カメラ、プロジェクター取り付け型電子黒板ユニット、iPad</p>

5. 研究成果のまとめ

生徒たちのポスト課題の質的分析はまだこれからであるが、授業後の感想では、「裏付けを考えたり、内容

授業後の感想結果(重複解答)		
1	いろいろな視点や意見を知れてよかった	30%
2	話し合いの大切さがわかった	2%
3	意見文を書く力がついた	17%
4	答えの出ない問題が難しかった	14%
5	自分の考えを文章にして伝えるのが難しかった	16%
6	説明力がついた	2%
7	考える力がついた	5%
8	ためになった	9%
9	裏付けの大切さがわかった	6%
10	発想の大切さがわかった	2%
11	楽しかった	8%
12	もっとやりたい	7%
13	その他(含む無回答)	3%

がぐちゃぐちゃになったり主張がだんだんずれてしまったり、とても頭を使う授業だった。でも、すごく力がついた気にもなった。主張は絶対ずれないように、根拠への反論、それへの再反論。反論、反論・・・。途中で何が言いたかったかわからなくなったり、同じことを何回も言っていたり、いろんな意見、考え、方面から考えてまとめる。この作業を平気でずらずらと書けるようにするには、もっともっとトレーニングを積むべきだなと強く感じました。」といった意見や、「自分が出した根拠に周りが裏付けしてくれたり、一人では出ないような事がたくさんあって驚いた。自分の意見とは異なる意見を聞けるのも楽しかった。自分の意見をまとめる難しさを初めて知った。」といった感想が出

され、討論を組み込んだ意見文作成が自己の文章へのメタ認知を育てるとともに、他者の思考に対する理解を深めたことが見て取れた。

6. おわりに

「はじめに」にも書いたように、論理的な文章を書く上では、多様な意見や視点を想定し、想定した「他者」の視点をいったん内化したうえで、自らのなかの「他者」と対話を交わしながら書き進めるという客観化とメタ認知が不可欠である。そのためには他者とのコミュニケーションを通じて、自己の理解を問い直し、語り直す活動が必要となる。しかし高校生はそのような活動（＝自己の考えを問い直したり、語り直したりする活動）が組み込まれた授業を、これまでほとんど経験していない。その意味で、今回 ICT の導入を図り、討論を活性化させることができたことは大きな利点であった。また、この授業を契機に他の教材や教科でも ICT の活用が進み、校内全体の ICT 利用環境が充実してきた。改めてパナソニック教育財団に謝意を示すとともに、今後さらに授業の改善に努めたい。

（参考文献）

三宮真智子「メタ認知を促す『意見文作成授業』の開発—他者とのコミュニケーションによる思考の深化を目指して」鳴門教育大学高度情報教育テクニカルレポート N01, 2007 年

代々木ゼミナール『小論文ノート 2006』代々木ライブラリー, 2005 年 所収

・鳥山敏子『いのちに触れる—生と性と死の授業—』〈1985 年刊〉

・スティーブン・ロー(中山元訳)「ジョディーとメアリーの最大幸福」『フィロソフィー・ジム「考える脳」をつくる 19 の扉』ランダムハウス講談社, 2003 年